

日本美術を世界へ

林忠正

日本美術を西洋に紹介

印象派を日本に紹介

日本の美術界にさまざまな提案

1853 (嘉永6) 年 11月7日—1906 (明治39) 年 4月10日



医者の家系に生まれ育つ

射水郡高岡町(現高岡市)に代々続く町医者・長崎家の二男に生まれました。祖父はオランダ流の医者、父も医者で、蘭学や国学にも通じていた知識人の家庭で育ちました。幼

いころから祖父や父の影響を受けて、西洋へのあこがれをもっていました。17歳のとき、富山藩大参事(現在の県知事)を務めていた林太仲の養子となり、林家を継ぎました。



大学に通っていたころの忠正(前列右)(個人蔵)

日本の文化や美術を広めたい

忠正は藩の推薦で上京し、大学南校(現東京大学)に入学しました。大学でフランス語を学んだ忠正は、従兄の磯部四郎がパリ大学に留学していたこともあり、自分もパリに留学したいと願っていました。1878(明治11)年、忠正が25歳のとき、パリ万国博覧会に参加する貿易会社の通訳の仕事を得て、大学を中退し、フランスに渡りました。

当時、ヨーロッパでは日本美術への関心が高まり、パリ万博でも日本の工芸品が人気でした。忠正は展示場で、日本の文化や美術に関心をもつ知識人や、まだ世に認められていなかったモネ、マネ、ドガなどの革新的な画家(現在の印象派*)たちにフランス語で解説し、たちまち彼らと親しくなりました。このときからの友情は、忠正がパリを去る日まで続いたのです。

日本美術と印象派を紹介

万博が終わった後、忠正は1884(明治17)年にパリで美術店を開きました。商売だけではなく、日本美術について解説したり、日本美術の研究者を助けたりして、日本美術の専門家になっていきました。

1890(明治23)年ごろから、忠正は浮世絵の販売に転じました。忠正によってパリに送られた浮世絵は、優れた作品が多く、今もそ

の価値が世界に認められています。それらの浮世絵は、ゴーギャンやゴッホなどにも大きな影響を与えています。忠正は優れた浮世絵は手元に残して、決して売りませんでした。そして浮世絵は低俗だと思っていた当時の日本人に、その芸術性を認めるよう説得したのです。

忠正は印象派の作品を初めて日本に紹介しましたが、そのころはほとんど理解されませんでした。



忠正が日本文化の概要を紹介した日本特集号『パリ・イリュストレ』1886年5月号(個人蔵)

*印象派【いんしやうは】 1860年代からのヨーロッパ絵画の改革を実現し、近代絵画を生んだ画家の集団です。その後の芸術全般に大きな影響を与えました。印象派の絵画は、現代でも最も人気の高い芸術作品です。

日本美術への思いを伝える

忠正は「1900年パリ万国博覧会」の事務官長に任命されました。事務官長はパリ万博の日本の総責任者で、民間人が任命されるのは例のないことでした。

この博覧会で忠正は念願だった日本美術の全体像を紹介することができました。8世紀からの国宝級の美術品800点が展示され、人々を感動させました。

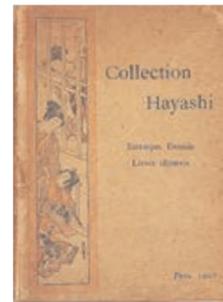
忠正はあらゆる機会に、日本の美術界に意見を述べています。1886(明治19)年には求めに応じて「高岡銅器維持の意見」を、故郷高岡の銅器職人たちに送りました。

この中で忠正は、日本の金属工芸品の高い技術を認めたいと、伝統にこだわることなく、世界の人々に理解される美しさを目指すべきだと説いています。忠正の視野は、常に世界全体に向けられていたのです。

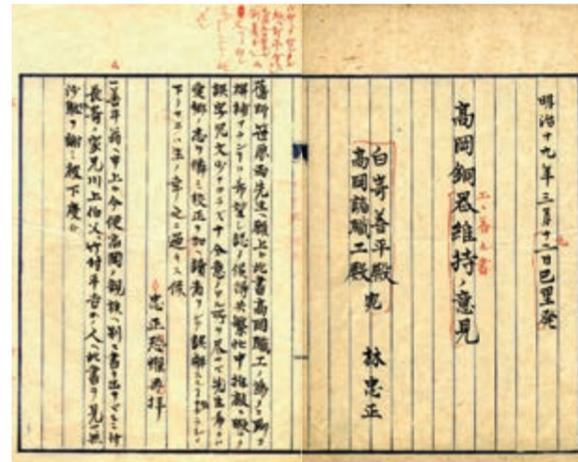
1905(明治38)年に帰国した忠正は、印象派絵画のコレクションを持ち帰り、自分の手で西洋近代美術館を造ろうと計画していましたが、果たせないまま亡くなりました。ポール・ルヌアールの素描作品だけは帝室博物館(現東京国立博物館)に寄贈されましたが、残りの西洋画の価値は理解されることなく、1913(大正2)年にアメリカで散逸してしまいました。



忠正が注文した2代北岳横山弥左衛門孝純作「菊花文飾壺」(個人蔵、東京国立近代美術館工芸館寄託、国登録美術品)



「林忠正浮世絵コレクション」(個人蔵)



忠正自筆の「高岡銅器維持の意見」の表紙と序文(個人蔵)

夢や志をかなえたポイント

- 必要な外国語を話せるようになる
- 知らない場所に勇気をもって飛び出す
- よいと思うことはよいと主張する

豆知識 忠正が通訳を務めた1878年のパリ万博では、エジソンの蓄音機のほか、自動車や冷蔵庫などが出展されました。

- 1853 (嘉永6) 0歳
高岡の医家・長崎家の二男として生まれる
- 1870 (明治3) 17歳
富山藩大参事 林太仲の養子となり林忠正と改名
- 1871 (明治4) 18歳
大学南校に入学
- 1878 (明治11) 25歳
パリ万博の通訳としてフランスへ渡る
- 1881 (明治14) 28歳
ルイ・ゴッソの「日本美術」の執筆を助ける
- 1884 (明治17) 31歳
パリで美術店を開く
- 1886 (明治19) 33歳
「高岡銅器維持の意見」を高岡の銅器職人へ送る
- 1890 (明治23) 37歳
近代絵画の収集を開始
- 1898 (明治31) 45歳
パリ万博の事務官長となる
- 1905 (明治38) 52歳
帰国する
- 1906 (明治39) 52歳
亡くなる

黒田清輝を見出した忠正

法律を勉強するためパリに来ていた黒田清輝の絵の才能を見抜き、法律よりも絵画の道へと進むよう勧めたのが忠正です。

後に黒田は「日本洋画の父」とも呼ばれるほどに活躍しました。忠正の人物を見る目の確かさを物語っています。



黒田清輝の代表作「湖畔」(東京国立博物館蔵、国指定重要文化財、城野誠治撮影)